

「福祉に学ぶ人間の尊厳」

1 「ふくし未来塾」がめざすもの

1) 新しい地域共生社会への改革

現在、日本では少子高齢化が急速に進み、社会は激しく変化している。この動向に対応するため、国は「我が事・丸ごと」地域共生社会の実現に向けて改革を急いでいる。すなわち、住民が地域の問題の解決に“我が事”として自主的に取り組み、世代や分野などの“縦割り”をなくして官民、機関、団体、企業などが“丸ごと”になって連携し、“地域力の強い共生社会”をつくるのである。

この改革は、2000年前後から世界各地で注目されてきたソーシャル・イノベーション（社会的刷新）、すなわち、人々が知識や知恵を出し合い、よりよい社会を創造する運動と流れを同じくする。

（参考：ソーシャルイノベーション 千倉書房）

2) 「ふくし未来塾」の理念と目的

この新しい社会づくりを目指し、令和3年、全国社会福祉協議会（全社協）は「ふくし未来塾」を開講した。その目的は、幕末から明治への激動期において国家の発展と国民の幸福に尽力し、全社協の前身である中央慈善協会の初代会長となった渋沢栄一の偉業を受け継ぎ、すべての人が平等に幸せに生きる理想的な共生社会を創造し、これを牽引するトップリーダーを育成することである。

本塾のキャッチフレーズは“令和時代の渋沢栄一の輩出”である。塾生の皆さんにかかる期待はきわめて大きい。

3) 本講の目的

本講では「ふくし未来塾」の理念に基づき、「ともに生きる豊かな地域共生社会」を実現するリーダーを育成するため、社会福祉事業の根幹である「人間の尊厳」を確認し、その実践について考える。

2 「人間の尊厳」を守る取り組み

1) 「人間の尊厳」の意義

「人間の尊厳」は人間が尊く、おかしがたい存在であることを意味する。人間は単なる手段でなく目的であり、人格としての価値をもつ。理性をもって考え、自己を知り、意志をもって自己を決定する自由で自立した“かけがえのない価値ある存在”である。

これに対し、疾病、障害、老化などによる能力や社会的状態の違いは単なる現象であり、「人間の尊厳」を損なうものではない。

2) 「人間の尊厳」を擁護する取り組み

① 自由と平等を尊重すること

支援を必要とする人を援助するにあたっては、自由と平等の精神に基づき、受容、非審判的態度、守秘義務、自己決定の原則を守らなければならない。

② 可能性を尊重すること

すべての人に可能性を見出し、これを高めるため全人間的復権としてのリハビリテーションを実施することが大切である。

「リハビリテーションを信じることは、人間らしさを信じることである。人間の尊厳に相応しく接し、人間としての成長を支援しなくてはならない。」

(“リハビリテーション医学の父” H.A.ラスク博士)

③ 目的をもつこと

人間が尊厳ある生活を送るためには、「生きる目的」が必要である。目的がなければ、生きる希望と力は失われてしまう。

「目的のない生活は、死より苦しい。すべての人間には生きる希望がなければならない。」(N.Y.大学 伊藤正義教授)

④ 必要な存在と認めること

「役立たず」とされることは、人間にとって大きな屈辱である。すべての人を「必要な存在」と認めることが大切である。

「人間にとって最大の不幸は、必要とされないことである。」

(“貧しき人々の母” マザー・テレサ)

3) 「人間の尊厳」を守るための留意点

① AI（人工知能）の正しい活用

テクノロジーの活用は生活の向上に有効であり、福祉事業において介護ロボットの利用が進むと予想される。少子化による人手不足の解消、利用者の自立と生活圏の拡大、介護者の負担軽減のため、積極的にAI化に取り組むことが求められる。

しかし、AI化への過度の依存は、個人の独自性を失わせ、「心の絆」を断ち、孤独やプライバシーの侵害など「人間の尊厳」を損なうリスクがあるため、細心の注意が必要である。

② 高齢者に対する尊厳に基づいた支援

高齢化が進み、「人間の尊厳」に基づいた高齢者の支援がさらに必要となる。健康で楽しく過ごすための支援だけでなく、“人生の先輩”としての老人力を認め、社会貢献の機会を提供し、誇りある生活が送れるよう支援することが大切である。

親しい人とのつながりや、静かに自分と向き合える環境を準備するなど、「心の満たされた生活」への配慮も必要である。

③ 尊厳ある終末期ケアと看取り

超高齢者（90歳以上の高齢者）が増加し、“看取り”が増えている。人間を尊重する支援は「生活の質の向上」から「尊厳ある死」へと向かう。死を正しく自覚することなしに意義ある生を送ることはできない。おしゃべりや娯楽などで死の不安を覆い隠すことで「尊厳ある死」を遠ざけてはならない。

高齢者が「生きてきてよかった」といえるような満足感や達成感をもって「人生の締めくくり」を迎えることができるため、「死生論」と「看取り」について学び、「人間の尊厳」にふさわしい“終末期ケア”と“看取り”を行うことが求められる。

「人間は、最期の瞬間まで精神的・人格的に成長することが可能である。最後まで充実した人生を送れるよう、人間の尊厳に相応しい看取りが必要である。」

（アルフォンス・デーケン著“死とどう向き合うか”NHK出版）

3 「人間の尊厳」を守る心構え

1) 自己改革

自己を変え、周りを変え、社会を変えなければならない。

「改革を実践するに当たっては、『誰が』といわず、

『吾が』と反問せよ。」 (社会思想家 河合栄治郎)

2) 自己反省

自己を改革するためには、真摯な自己反省が欠かせない。

他者の不祥事を「対岸の火事」とせず、自分の問題としてとらえなくてはならない。

「誰の心にも潜む差別心と真剣に向き合うべきである。」

(相模原障害者殺傷事件に対する重度障害者である福島教授の言葉)

3) 自己研鑽

自己を改革し高めるためには絶えざる自己研鑽が欠かせない。

リーダーには、以下の事項に努めることが求められる。

① 知的能力の向上

自分に不足しているものを認め、謙虚に学ぶこと

学びにより、「人間の尊厳」はより明らかになるであろう。

「学ぶことはよく生きることであり、学ぶことに徹すれば、生きることの尊さがわかり、人生の深みを体験する。」(伊藤隆二)

② 人格の形成

優れた品格と教養、知情意のバランス、正しい価値観、強い責任感、他者を受け入れる包容力、現実に基づく慎重さ、迅速な行動力、広い視野と高い志をもつ創造力を養うこと

③ 自己制御の強化

他者との関係を強固にするため、忍耐力を養うこと

自己を制御できない者に他者をまとめ導く力はない。

④ 対人関係の拡大

コミュニケーションスキルを学び、公共心、共生力、まとめる力、人間的魅力による求心力を養うこと

優れた人脈なしに社会と連携した福祉支援は望めない。

4 「人間の尊厳」に基づく共生社会づくり

1) 「人間尊重」から「同胞精神」へ

人間尊重の精神を同胞精神へと広め、「人間の尊厳」に基づく共生社会を創造することは、福祉事業の究極の目的である。

「すべて人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。」

(世界人権宣言 第一条)

2) 苦しみの共有

苦しむ人と心を共にすることは同胞精神の真髄であり、共生社会の基礎である。特に、最も恵まれない“最後の一人”の苦しみを共有し支援することは、社会正義の実践でもある。

「正義の核心の一つは、最も不遇な立場にある人の利益の最大化を配慮することである。」(

社会哲学者

J. ロールズの正義論)

3) 共に生る理想社会の先駆者たれ

現在、世界では紛争と災害により多くの犠牲者や難民があふれ、国内では虐待、殺害が後を絶たず、貧困や孤独などにより不安や苦悩を抱える人が増えている。この苦難に満ちた世界に平和と安らぎをもたらし、「共に生きる豊かな社会」を創造するためには、「人間の尊厳」を守ることが必要不可欠である。

「ふくし未来塾」に学ぶ塾生の皆さんが、「人間の尊厳」を守り、新しい共生社会を創造する理想に向かって前進されることを心より願う。

渋沢栄一の「夢七訓」

「夢なき者は理想なし、理想なき者は信念なし、
信念なき者は計画なし、計画なき者は実行なし、
実行なき者は成果なし、成果なきものは幸福なし、
ゆえに幸福を求むる者は夢なかるべからず

以上